

寺田屋：坂本龍馬と幕末

坂本龍馬(1836-1867)は、土佐（現在の高知県）の下級武士の家に生まれた。龍馬は、日本で最も人気のある歴史上の人物の一人である。彼の人気は、彼の死後 150 年以上経った今でも衰えることはない。

1848 年には、龍馬は年齢が若いにもかかわらず、すでに熟練した剣士であった。1853 年には、江戸(現東京)の有名な千葉道場で修行した。この時、彼はマシュー・ペリー提督の黒船の来航と、日本が西に強制的に開国させられるのを目撃した。

日本が外国勢力に比べてどれだけ弱いかを見せつけられ、彼は強力な反外国感情を掻き立てられた。

1861 年に反幕府勤王党に加わるために土佐に戻ったころには、龍馬は「天皇を尊重し、野蛮人を追放する」という尊王攘夷運動を強く信じていた。彼はまた、徳川幕府によって課された社会的不正や厳しい制約を日本から取り除くことを強く決意した。

龍馬の短い生涯の間の彼の功績は素晴らしいものである。彼は薩摩(鹿児島県)藩と長州(山口県)藩の間の重要な薩長軍事同盟を仲介した。

革命家仲間である西郷隆盛(1828-1877)と協力し、長崎に拠点を置く日本初の商社、亀山社中を設立した。彼は、平和的な手段によって帝国の支配を回復するための包括的な 8 か条である船中八策を起草した。

しかし、それは武士の精神、彼の向こう見ずな性格から生まれた、死と隣り合わせの危険をはらむもので、1866 年には寺田屋で襲撃事件が起きる。この事件で彼の地位は、日本の総体的な構想において、確固たるものとなった。彼は 1867 年 12 月 10 日 32 歳の時に京都で暗殺された。